

図5 年平均降水量 (mm) の分布

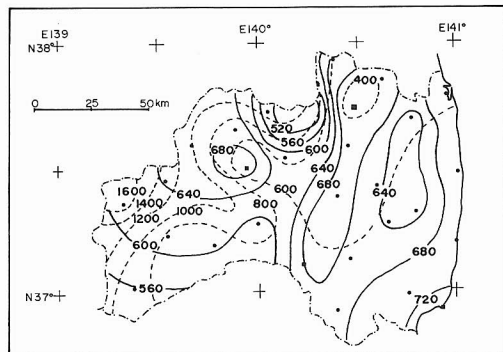


図6 年平均蒸発散位(実線, mm)と年平均有効雨量(破線, mm)の分布

は前線, 日本海, および南岸低気圧, 台風などによるところが大きい。

一方, 第6図に Thornthwaite (1948)の方法による蒸発散位の分布を示した。蒸発散量とは一定地域における植物の生長に利用される水量と, 土壌面からの蒸発量の緩和で, 土壌水分が飽和されているときの蒸発散量を蒸発散位といい, 月平均気温や緯度の関数として求めたものである。しかし, この Thornthwaite (1948)の方法は気温が負の時の蒸発量が無視されていたり, その量が年平均気温に大きく依存していたりし, 必ずしも蒸発散に関する物理過程が十分配慮されたものではない。蒸発量は基本的に, 大気中の水蒸気量と地表面の水蒸気量との差, および, 水蒸気を鉛直に輸送する機構(大気の安定度, 風速の鉛直分布)に依存するもので, 気温が負の時も地表面からの蒸発は起こる。また, 気温が正の時でも大気中の水蒸気が地表面に吸収されることもある。

福島県内の蒸発散位の分布は, 相対的に気温の高い, 太平洋岸, 福島, 郡山, 会津盆地で約 700 mm と多く, 他の山岳地帯では, 約 600 mm と少なくなっている。また, 第5図の年平均降水量から, この蒸発散位を差し引いた値を有効雨量といい, その分布を第6図に示す。福島, 郡山, 会津盆地周辺では, 相対的に雨量も少なく, 気温が高いため蒸発散位が大きいので, 有効雨量が少なく, 他の山岳地帯は, 相対的に雨量も多く, 気温が低いために, 蒸発散位が小さく, 有効雨量は多くなっ

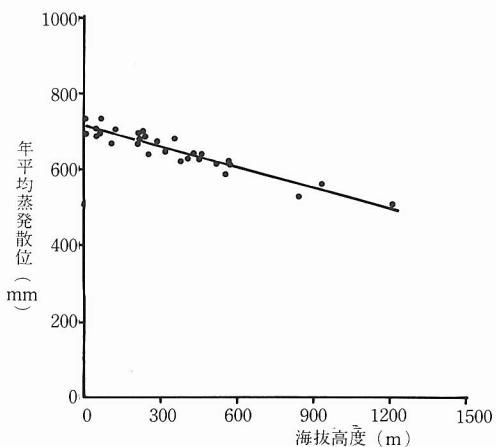


図7 年平均蒸発散位 (mm) と海拔高度 (m) との関係